

第2分科会

13:30～15:30



子どもの貧困 ～子ども食堂の取組～

コーディネーター

栗林知絵子氏 (特定非営利活動法人豊島子どもWAKUWAKU
ネットワーク理事長)

パネリスト

大橋 雄介氏 (特定非営利活動法人アスイク代表)

門間 尚子氏 (せんだい子ども食堂代表)

兼子 佳恵氏 (特定非営利活動法人石巻復興支援ネットワー
クやっべす代表)

栗林 知絵子氏 初めまし
て。今日はよろしくお願
いします。

私は福祉とか教育と
か、特に専門家ではあり
ません。でも、虐待フォー
ラムの中に子ども食堂、
こういうテーマを作ってく
ださったことに感謝申し
上げます。そして、私も自
分を「おせっかいおばさん
」だと思っていますが、今
後こうした市民のおせっか
いさんたち、一昔前は考え
られなかったと思います、



人の家の子どもを呼んで御飯を食べさせて、そんな
つながりを作ろうとしている人たちが、このように
たくさんいらっしゃるわけです。そこと行政、いろ
いろなところが連携して、どうやってみんなが、子
どもたちが笑顔で成長できるか。虐待とか保護をさ
れてしまうとか、犯罪に巻き込まれるとか、そうし
た子どもが一人でも減るために、皆さんと一緒に今
日は2時間、考えていきたいと思っています。よろしく
お願いします。

まずは、こちらの3人のパネリストの方から活動
紹介をしていただくのですが、その前に、今日お越

しいただいた方がどういう方なのかを、こちらのほうで情報を仕入れると、またちょっと話し方とか伝えたいことも変わってくるかと思しますので、今日宮城県内からいらっしゃったという方はどのくらいいらっしゃいますか。逆に、宮城県外からいらっしゃった方は。はい。やはり宮城のことを中心に、宮城のためにという感じで話してください。

それと、行政の方は。行政、あとは実際に子どもたちに関わっている、児童養護施設とか、子ども家庭センターさんなどから来ていらっしゃるという方はどのくらいいらっしゃるのでしょうか。

では、子ども食堂とか子どもの貧困とか虐待、そういうことに関心を持っている、あと実際に自分たちがそういう支援をしているという方、どのくらいいらっしゃいますか。両方上がらない方もいますが、では、こういう皆さんで、つまり多方面の方たちで、今日考えられるというのが、まずすごくうれしいことだと思います。では、思いを込めた発表を兼子さん、門間さん、大橋さんの順番で20分ずつよろしくをお願いします。

兼子 佳恵氏 石巻復興支援ネットワークの代表理事をしております兼子と申します。

私たちの団体は、震災後に立ち上がった団体ではありますが、震災前は、お母さんの子育ての個人的な悩みを聞いたり、それから子どもたちの環境教育のサポート事業などを12年ほど経て震災後に法人化した団体になります。

私たちの活動を通して、そして活動の中から生まれてきた「ママ子ども食堂」について、少しだけお話をさせていただければと思っております。

多様な視点と当事者意識というのを、私たちの活動の中では一番重きを置いて、活動させていただいています。

活動を始めたきっかけ、法人化したきっかけですが、2011年3月11日、東日本大震災が起きて、まさにそれがきっかけです。2枚目のこの写真は、実は私は当日、家の周りが本当に水の中という感じで、外に一歩も出られなかったのです。3日後、外に出られるようになって、一番最初に写した写真がこれ



です。それまでほとんど情報もない中で、とにかく何が起きているのか分からないけれども、何かとても怖いことが起きているということだけで、外に出られなかったので、家でとにかく子どもたちと一緒に過ごしていたという感じでした。

私、冒頭でお話ししたとおり、12年ほどボランティア活動をずっとやっていたので、近い親戚は亡くしていないですけれども、その中の活動で知り合っただけで一緒にやってきた仲間や、それから子どもたちの学友なんかを亡くして、とにかく自分たちにできることからスタートしようということで活動を始めました。

うちの団体、通称「やっぺす」と言われています。当時、本当に「頑張ろう」とか「がんばっぺ」という言葉をたくさんの方に掛けていただきましたが、私たちは本当に精一杯頑張っていたので、もうこれ以上頑張るところがない、その言葉を聞くたびに胸が締めつけられるという、そういう日々を送っていたので、一緒に何かやりましょうという意味の「やっぺす」ということで活動をスタートしています。「やっぺす」、地元の人が多いので御存じだと思いますが、石巻の方言で「一緒にやりましょう」ということです。

今、産休中のスタッフもいますが、12人中11人のスタッフが地元の出身で、そして12人中10人が女性、特に子育て中のお母さんが中心の団体になっています。

うちの活動は、4つの分野で活動させていただいています。もともとやっていた子育て支援、それからその地域を震災前よりももっとすてきな場所にしていこうということで担い手の育成、それから避難所から仮設住宅へ移ることがあったので、仮設住宅へのコミュニティ支援、それから外部からの支援が入ってきていたので、そうしたところのコーディネート事業という4つの柱でスタートしました。

一番最初に掲げたのは、「やっぺす隊の活動は仮設の最後の1人が卒業するまで」ということで活動をスタートしています。

その中の一つは、やはり石巻と企業をつなぐということで、新人研修の受入れや、それから大学生、海外の留学生等々の地元に来る人たちのアレンジなどもしています。

あとは、私たちやはり震災を経験して、外の人たちに伝えていこうということで、この写真は、東京のナカジマコーポレーションさんという企業と一緒にずっとやっている防災を、減災を伝えるというグッズです。この写真は第4弾ですが、現在は第5弾が発売されていますし、第6弾が来年の2月、東京駅スタートで発売が決まっています。

仮設の支援に入って、私たちが子育て中のお母さんと話をしている最初に出てきたのは、やはり家族の収入がないし、子どもが小さいので仕事がないというお話でした。内職仕事というと暗いイメージがあるので、「おうち仕事」といって家で仕事をする、そういう女性たちに外の企業さんとのお仕事をつなぐということをやっています。これをやるたびにこだわってきたのは、時給に換算したら700円になるようなお仕事だけを企業さんと協議しながら、皆さんにおつなぎすること。なので、結構仕事したい人はいるけれども、なかなか仕事がないという現状がありまして、自分たちの石巻発のアクセサリーブランドということで「Amanecer」というブランドが立ち上がります。

一方で、やはり私自身も震災後にこの法人を立ち上げたのですが、そういう起業する人たちの支援事業ということで、担い手の育成事業にはなるのですが、起業ファンドというのを立ち上げます。これも2012年からスタートして、今現状は、石巻地域に限らず沿岸部の起業家のコミュニティのサポートをやっています。様々な先生方に来ていただいて、そして石巻でしか学べないということで現地に来てもらう、そうしたきっかけづくりもしています。

それから、起業家だけではなくて、人の育成ということで人材育成スクール、これも同時期の2012年からスタートしている事業になりますが、この事業を作るときに、私自身がやはり子育てして、そして再就職するときに非常に困ったのです。ハローワークのようないろいろなスクールがあるのですが、9時から5時まで、毎日行かないといけないというような縛りがあったので、私たちは子どもがいるから頑張れる女性を応援したいという思いから、託児をつける、それから全部の授業を録画して、それを観れば全員が卒業できるようにしました。小さいですけども成功体験をしていただくということで、このときは50名の方がスクールに来てくだ

さって、全員が卒業して、そして約半数の人が地元の企業や民間の団体に就職するということがありました。

その翌年に、たまたまですけれども、日本ロレアルさんが石巻市の支援をスタートしていて、そこで現地に残るもので何か一緒にできることはありませんかというお声掛けをいただいてスタートしたのが「Eyes for Future」という女性に特化した人材の育成スクールでした。その年度によって、フェーズが変わっていくのに伴って起業家支援というところに発展していきます。

こうして頑張っている女性がいる一方で、まだ子育てに悩んでいる、そういうところで立ちどまっている方々のスクールということで、「ノーバディーズパーフェクト」というカナダ式の親育てプログラムをスタートさせます。これは、本当に子育てに自信がない、今やっている子育てって本当はどうなのだろうと思っている人たち向けの親育てプログラムです。

私自身も、やはりこういうものがあつたら、本当に子育てするときに助かったなという思いから作った、そういう講座になります。ここもファシリテーターを私たちが東京に取りに行っていて、実際に始めたのですが、ニーズが高いのに講師として仕事をする機会がなかなか持てないということで、ファシリテーターの養成講座も併せて現地で行いました。

そこから一歩踏み出した人たちが、今度は地域社会とつながるということで「やっぺす！ママのわスクール」というのをスタートさせます。子育てしながら再就職を目指す、そういう女性たちの輪をつくっていきましょと。それから、まだ子育てには専念したいけれども地域と関わりたい、そういうママたちの輪をつくるというスクールをしました。

このときに気を付けていたのは、先ほどお話しした「Eyes for Future」のようなスクールでひとり立ちした女性が講師をするという循環型のスクールにしたことです。この一歩先を進んだのが「やっぺす！スクールこっこん」ということで、本当に地元の就労女性に向けてのスクールを翌年からやっていました。

そういうスクールをする中で出てきたのが、子ども食堂の話でした。一般的に皆さん誤解しているとか、地元の人がすごく誤解していたのですが「貧

乏な人が行くところだよね」とか「貧困家庭じゃないと行けないんだよね」という話になっていたのです。けれども、自分たちも一生懸命頑張って子育てしていて、旦那さんが夜遅く帰ってくるから、ほとんどワンオペで、そして夕方の食事の時間なんかは、子どもを叱らない日がない。そうではなく、本当に子どもは可愛いし、子どもと一緒に温かくておいしい食事をゆっくりした時間の中で過ごしたいという声を聞いて、では、私たちは、ママと子どものための食堂をしましょうということで、「やっぺすママ子ども食堂」をスタートさせました。

初年度は、夜御飯の時間帯ということでスタートしたのですが、やはり夜だとなかなか出にくい。家族、要するにお舅さんたちに気を使ってなかなか出られない。けれども、私もゆっくり昼間の時間に行きたいという声を頂いて、ランチと夜御飯の時間帯の2つに絞った食堂がスタートしています。

とにかく家事とか育児で忙しい、子どもとゆっくりする時間がとれない親子が利用できるということと、それから、ただのママ子ども食堂ではなくて、ママが自分の時間も持てるような立て付けにしています。この後の写真でご覧いただけますが、子育て相談もプラスしてあったり、食事の後にママが癒されるようなマッサージを提供してくださるような方がいて、食事の後に一人ずつ個別でお話を聞きながらマッサージを受けて帰っていただくという形式にしています。

とにかく、ひとり親世帯とか生活困窮者世帯に限らない、そして月に1回、2回でも温かい食事を安価で食べられるというのがうちの特徴かと思っています。

本当にスタートはこのような感じで、夕方みんなで集まって食事をとる。やはり知らない人同士がつながり合えるのもすごくいいところですし、自分の子どもだけではなく、ほかの子どもたちと関わることで、育児書どおり育ってなくても大丈夫なんだという子どもの成長に対する安心感や、いつ来てもいいという安心・安全な居場所だというふうな認識もいただいています。

ボランティアの中には、お父さんボランティアさんもいらっしゃって、やはり私たちではできない、特に中学生、小学校高学年くらいの男の子たちとゲームで遊んでくれるような、そういう人たちもボ

ランティアさんとして参加しています。

それから、食材の提供です。地元のお肉屋さん提供して下さったり、それから農家さんがお米を届けて下さったり、ご自身たちの活動の中で育てた野菜を提供して下さる団体、あとは自家栽培と言いますか自分のお庭で育てているものを持ってきて下さる人たちもいます。

ここに関わるボランティアさんですが、決して大人だけではなく、子どもでも、学生さんでも、こうした活動に関わりたいという子たちがいらっしやるので、そういう子たちにも実際に入ってもらうということをしています。

このときに気を付けているのが、とにかく当事者意識をそれぞれが持てる環境を作ることがすごく重要だと感じてやっています。誰かに頼まれて何かをするという一方的なボランティアをお願いするという関係性では、何かあったときに「だって頼まれたからやったのに」とか、「言われたからやっただけじゃない」というように、責任転嫁をする方がたくさんいらっしやいます。なので、自分が関わることで、たくさんの人に喜んでもらったと感じてその人にとっても居場所になる、その人が関わることによって、更にもっといい空間ができるというような、そういう体験もしてもらいながらやっています。

実際に、今、子ども食堂がスタートして2年目を過ぎたところですが、会場が狭いので、新しく10月から大きいところに移動することにしました。これも本当に手づくり感満載なのですが、大きい工場だったところをリフォームして、子どもたちが遊んだり学べたりする場所、それからお母さんたちも同じように過ごせる場所ということでやっています。

今年度、この場所を改修するに当たって、「子ども食堂を休むのもなんだよね」という話をしていたところ、企業である日清製粉さんの御協力をいただいて、今度は子ども食堂の親子でのキッチンということで、一緒にお料理を作るという取組もやってみました。これも、子どもだから危ないではなく、しっかり大人の目が行き届いていれば、みんなそれぞれできることがあるという、子どもたちにとってもきちんとそこに関わる理由があるというものにしました。

なので、本当に楽しい時間を過ごしてもらっています。食事の仕方はいろいろあるかと思えますけれ

ども、私たちがこの子ども食堂でいつも言っているのは、「ここに来たときには危ないこと以外は子どもを絶対に叱らないでください」という一つのルールです。それ以外は何のルールもありません。人のものを食べようが、何をしようが、とにかくおいしく楽しく食べていただくということです。

この料理教室をやるときに、メニューの考案も御協力をいただいています。レシビ化して、実際に次に開催する子ども食堂のメニューになるということもあります。新しい会場が完成して初めて、先週開催したばかりですが、こうして子どもたちが隣の空間で遊び、そして食事をするときにはきちっと食事をする空間に戻ってきて、みんなで「いただきます」と言って食事をとりました。

本当に、お母さんが「いつもは食が細くてなかなか食べない子どもなんですけれども」というお話をしながらも、子どもたちがたくさん食べてくれます。だから、お母さんたちも、いつもだったら「早く食べなさい」というようなことを言わないといけаниのですけれども、ここに来ると何も言わなくても勝手に食べてくれるので、すごく安心して関わると言ってくださっています。それから、特定の誰かに向けてやっているわけではないので、誰でも参加できます。その中にたまたま、本当に専門的な支援を必要とする人たちが関わって、お話の中で、当事者であるママたちと子どもたちと専門家とをつなぐということもさせていただいています。

なので、ここで子育て相談に関わる先生は、保育士の資格を持っていらっしゃる方や、それから特別支援学校の園長先生をやっていたという先生方をお願いをしています。ただ、それは特別「こういう人が来ているから」というお話ではなく、「たまたま来たときに、そこにそういう人がいる」という空間を作るということが一番重要なのではないかと考えています。

ですから、私たちの活動の中のママたちの声からできてきたママ子ども食堂ですけれども、とにかく子どもたちが笑顔でおいしいものをお腹いっぱい食べられる、そういう居場所をこれからも続けていきたいと思っています。

私からは以上になります。御静聴ありがとうございました。

栗林氏 兼子さん、どうもありがとうございました。
では次、門間さん、よろしくお願ひします。

門間 尚子氏 皆さん初めまして。せんだいこども食堂の門間と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。



今、スクリーンに映像が出てまいりますけれど

も、私は主に東北六県で子どもと女性の支援ということをしていただきまして、約20年になります。デートDV、ドメスティックバイオレンス、それから性暴力被害の女性と子どもの支援を長らくさせていただいております。その延長線上で、今回こども食堂を2016年から仙台市内3か所で仲間とともに立ち上げております。

今日、私どもせんだいこども食堂のお話をさせていただく前に、私たちが出会った子どもたちの声を皆様にお届けしたいと思ひます。幾つか書き出してお持ちいたしました。

あるひとり親世帯の女子中学生なのですが、お姉ちゃんとお母さんと3人暮らしです。

「姉は、学校にバイトに忙しい。母も仕事を掛け持ちして忙しい。姉も母も、いつも疲れている。そんなふうになりたくない。いつまでも中学生でいたい」

それから、ある施設にいる女の子の声です。

「家にある薬（薬物のこと）が悪いものなんて知らなかった。親にされたこと（性虐待のこと）がおかしいことだと思わなかった。物心つく前からされていたから、当たり前のことだと思っていた。でも、すごく嫌でいつも泣いていた。嫌だと思ひ自分がおかしいのかとずっと思っていた」

小さい頃から、薬物や虐待、暴力がある中で育っていると、それがおかしいとか、これはよそでもあることなのか、そういったことが全く分からずに育ってしまうということがあります。それから、私がこれまで出会った子どもたちの多くが、「親や家から自立したい、一人で生きていける方法を教えてほしい」ということをよく尋ねられます。また、非常に多いのが「生きる意味が分からない、どうして自分は生きなくてはいけないのか」ということです。

あるドメスティックバイオレンスが起きている家庭で育った子どもたちの声です。

「みんなの家と同じように仲よし家族を振る舞うのに疲れた。両親は不仲で暴力は日常茶飯事。そんな家なのに、友達に「遊びにおいでよ」なんて言えない」

多くのひとり親世帯の子どもたちが、関わりが深くなっていくと漏らす言葉があります。

「うちは母子家庭。兄弟も祖父母も親戚もいない。(これは家庭が孤立しているということです。そして、ほとんどの子どもたちが言います。) お母さんが死んだら、私はどうなるのだろうか」

いろいろな子どもたちの声を仕事や活動の中で伺ってきました。そんな約20年です。今、皆様にご覧いただいているのが、その子どもたちの声です。東北地方の中学校や高校・大学にお伺いするときに、事前に子どもたちにアンケートをとらせていただいています。そこで出てきた子どもたちの悩みです。「もしよかったら、あなたの悩みを聞かせてください」ということで出てきております。

「悩みなんてありません」と書いてくる子も多いのですが、1つ悩みを書いていると、その後ろには3つも4つも5つも悩みを抱えている子どもたちが非常に多いと感じます。

私たち人間の体と心の成長という画像をご覧ください。オギャーと今日生まれた子どもが、明日突然中学生にならないように、私たちは段階を踏んで成長してまいります。この成長の中で傷となるような出来事、こういったものが起こってくると、例えばこれは暴力だけではありません、東日本大震災だとか、今まで生きてきた価値観がぐらっと変わってしまうような、非常に大きな出来事が起きてくると、いろいろな喪失体験などが生まれてまいります。そうすると、これまで目指していた自分の人生というものを變更せざるを得ないということが起きてまいります。

この喪失体験をすると、心理的にも、身体的にも、行動的にも、社会的にも、様々な反応が出てきてしまう。ですが、この喪失体験にたくさんの人が寄り添って、信頼関係の中で回復していくと、実は傷となるような大変な出来事があっても、その後、今まで自分が想定していた道とは違う道を歩むことにはなりますが、違う道を進みながら、そこで新しい人

間関係、たくさんの力、可能性を得ていく。そんな成長が起きてまいります。

私どもは、今、仙台市内3か所で月2回ですが、せんだいこども食堂を2016年からさせていただいております。どうしてこのタイミングでさせていただいたかという、震災5年目の春、これまでいろいろな出来事があったけれども、みんなで一緒に御飯を食べて新しい環境、新しい人間関係へ一歩踏み出していこうとの思いで、震災5年目にこだわって立ち上げさせていただきました。「おなかもころもいっぱい」、これが私どもの合い言葉でございます。

子ども食堂は既に御存じの方も多いかと思いますが、お子さんが一人でも安心していらしていただける食堂です。バランスのとれた食事を無料又は低価格で子どもに提供して、子どもたちが思い思いにゆっくり時間を過ごせる場所です。この写真は、宮城県内の子ども食堂の写真です。そして、子ども食堂は、今全国に広がっている子どもの居場所の一つです。子ども食堂というのは、今年の3月の調査ですけれども全国で約2,400か所とされています。ここ宮城県内では、私が調べましたが3月当時は44か所と発表させていただいたのですが、現在はもう既にその44か所を軽く超えています。

2016年に子ども食堂を始めさせていただいたときに、「宮城県内で3か所目ですね」とマスコミの方に言われました。ですが今、2018年には、仙台市内だけでも40カ所ぐらいあると思います。宮城県内だと、多分50か所か、もしかしたらそれ以上になっているかもしれません。10倍以上の広がりを持っています。子どもの居場所というのは、子どもたちが多様な価値観、これは子どもの居場所で出会う人たちのことです、に出会える場所、家庭や学校とは異なる経験ができる場所と言えるのではないのでしょうか。

私たち子どもの居場所づくりをしている人たちが、非常に注意をしている「孤立」というものがあります。子どもの孤立、よく言われるものが3つの孤立としてありまして、家庭での孤立、学校での孤立、そして地域での孤立。この3つの孤立が起きてしまうと、どうしてもお子さんたちが抱えている生きにくさやSOSに気付くことがなかなか難しくなってくると言われています。ですから、子ども食

堂をはじめ子どもの居場所づくりをしている私たちは、孤立させない、ひとりぼっちにさせないということを中心掛けて活動をしています。

先ほど兼子さんから共生食堂の話がありました。後で大橋さんからケア付食堂のお話が出ますが、今の子ども食堂は大きく分けると共生食堂とケア付食堂というものがあります。これについては、皆様のお手元の資料にも記載させていただいております。

湯浅誠さんという方が、子ども食堂の類型というものを作られまして、それに少し手を加えさせていただいて、宮城県内の子ども食堂の一部を掲載したものを今日お持ちいたしました。ケア付食堂が少ないことがご覧いただけると思います。当初、ケア付食堂を目標に始めたけれども、なかなか子どもたちが集まらず共生型、地域に開かれた食堂としところ、たくさん子どもたちが来るようになり、そしてその中から、いろいろな課題を抱えた子どもたちが見えてきて、今では共生食堂とケア付食堂を二重で行っていますというような子ども食堂も出てきています。

宮城県内の子ども食堂には、県内だけではなく、県外からも食材が届いています。最初は一人一人別々につながっていた農家さんたちの連携が始まり、「子ども食堂支援農家の会」というものが発足しています。今、11の農家さんがこちらに入ってくださいっております。画像をご覧ください。おいしそうな子ども食堂のメニューが出てまいりました。どれも工夫をしていますが、実は皆様の御家庭でも通常お召し上がりになっているお料理ばかりです。向かって左上、カレーライスです。白い御飯のところにウインナーソーセージが入っておりまして、あれを抜くとカレーが流れ出るつくりになっています。これはダムカレーといいまして、今、全国各地で展開されておりますが、ちょっとした工夫で、お子さんたち大喜びです。このダムカレー、私たちもくせになっておりまして、お皿の縁の高さですとか御飯を盛る角度ですとか、カレーの濃度に非常にこだわりながら、みんなで楽しみながら作らせていただいております。

たくさん御寄附をいただく中で、例えば果物がたくさん集まりましたというときには、大勢で果物を楽しもうということで、なかなか家庭ではできないですが、丸々スイカをくり抜いて、御寄附いただ

いた果物を中に入れて、みんなでフルーツポンチにして食べたというようなこともあります。

見て、食べて、交流して、自分が大切にされていることを、頭ではなくて心や体を通して子ども食堂の中で子どもたちは体感しています。私たちが生きていく中で幾つもの大切な必要な力がありますが、その中でも非常に重要だと言われている自尊感情をたくさんの人との関わりの中で、子どもたちは育んでいっています。生きるために必要な力～安心感、信頼感、愛情のやりとり、セルフコントロール、自尊心。私たちは、生きるために必要な力としてこの5つの力を、今、非常に意識をしています。

一番初めに安心感、東日本大震災や北海道の地震や熊本の地震もそうでした。私たちは、余震が続く中、ゆっくり寝ることもできませんでした。誰にも何にも命を脅かされない、不安のない安心できる環境、これが非常に重要です。そういった環境があるからこそ、私たちはほかの方々と信頼関係を結んだり、愛情のやりとりができたり、そして自分の一日の生活をコントロールできる。将来の夢、希望を描くことができる。自分のことが大切な存在だと感じると同時に、周りの方たちのことも大切なんだ、大切にしたいなという気持ちが育まれていきます。

この生きるために必要な5つの力というのは、虐待や暴力、過酷な経験、環境の中で壊されてしまいがちです。この5つの力の取り戻しというのが、家庭や地域や学校、そして私たちが取り組んでいる子どもの居場所づくりの中でもしていくことができるのではないかと考えております。

子どもの居場所で、子どもたちは一体何を得るのか。繰り返しになってしまっていますが、たくさんの人たちとの関わりの中で、子どもたちは多様な価値観に出会っていきます。多様な価値観と出会うことによって、家庭や学校では得られない経験にもつながってまいります。今、教育の分野では、非認知能力といって、テストではなかなか測りきれない力というのが注目されていますが、非認知能力というのは、テストなどで測れていたような認知能力との相互作用で生きる力を強めていくなると言われています。

この非認知能力の育みがなぜ大切なのか。それは、私たちの日常生活の中で、大変な出来事が起きたときに、その困難を乗り越える、回復する、そして新たな道を自分で築く、周りの人と手をつなぎながら、

協力をしながら、支え合いながら、新しく自分たちの生きる道を構築していくという力につながってまいります。

家庭や学校以外に、子どもたちの生活圏で信頼できる大人が見守ってくれる安心できる安全な場が継続的にあるのかどうか、これが非常に重要だと思っております。私たち子どもの居場所づくりに取り組んでいる者は、一度上げた旗を下ろさないよう頑張っています。それはなぜかという、いつ子どもたちが戻ってくるか分からないからです。最近来ないなという子どもたちが、1年後、2年後、また何かあって戻ってくるかもしれない。そうしたときに、私たちが一度上げた旗を大人の事情で下ろすということは、許されないことだと思っております。

ですから私たちは、連携をしながら、お互い支え合いながら、この子どもの居場所をこれからも継続していきたいと思っております。子どもたちが悩みを抱えたとき、信頼して相談できる一人の大人がいることで、社会の信頼感を取り戻し、孤立や困難な状況から抜け出すきっかけとなると考えております。

では、子どもたちに関わる、寄り添うことは、チームや団体を作らなくてはできないのか。そうではありません。先ほど冒頭で、栗林さんが「おせっかいなおばちゃんです」とおっしゃられましたが、私たち一人一人がおせっかいなおちゃん、おばちゃんになって、地域のたくさん子どもたちと個人で関わり合いを持つことができたらいいなと思います。でも、今は防犯上、突然声を掛けられたら怖がられるでしょう、逃げられるでしょう。そこで例えば、毎日、お家の前の玄関を掃き掃除してみてください、同じ時間に。それがもし登校の時間でしたら、同じ時間に大体同じ子どもたちが歩いていきます。登校していきます。そうしたら、「おはよう」の声がけから始まって、それがだんだんと3か月、半年もするとお互いに名前が分かるようになっていきます。「おはよう」を言う前に、子どもの名前を付けて、「タカシ君、おはよう。いってらっしゃい」。たったそれだけの言葉のやりとりでも、その子どもとつながっていくことができます。冬になっても半袖、半ズボンを着ていないか。身長が伸びているのに丈の短い洋服を着ていないか。夏だったら、どうしたんだろう、タカシ君が行った後、どうも臭いに変だな。そういったちょっとしたことに、毎日会うからこそ、

毎日顔を会わせるからこそ気付くことができるのではないかと考えております。

子どもたちの直面している状況は、マスコミでたくさん報道されていますが、いざ私が地域の一人として生活すると、なかなか見えてこないということがあります。ですが、確実に私たちの暮らす社会、地域の中には、そのような子どもたちがいます。たくさん手が添えられることで、子どもたちが抱えている課題、困難、そして子どもたちの後ろには必ず大人がいます。家庭があります。その家庭が抱える困難、課題にも関わっていくことができます。今もおそらく、皆さんの多くの方が、地域で様々な活動をされていらっしゃると思います。また、お仕事を通して関わっていらっしゃるかと思っております。どうかこのフォーラムが更に多くの手を子どもたちへ向けて伸ばしていけるような、たくさんの方の手を必要としている子どもたちに、この私たちの手が届くような、そのきっかけになればと思っております。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

栗林氏 門間さん、かなり熱い発表をありがとうございます。

行政の皆さん、これほど思いの熱い市民がいっぱいいるのです。そことどう連携できるかという話も、大橋さんからしていただけるのかと思っております。よろしく願います。

大橋 雄介氏 改めましてNPO法人アスイクの代表の大橋と申します。

僕は、門間さんのように熱く語れないので、すみません、ちょっとリラックスモードで聞いていただければと思います。

簡単な自己紹介になりますけれども、どうして私がこういう子どものサポートをする活動をやっているのかということ疑問に思われる方、いないかもしれませんが、私自身は、もともと子どもの福祉や教育、そういったことを学んできた人間ではなく、兼子さんも震災後とおっしゃっていましたが、2011年の震災後をきっかけにして、こういう



活動を立ち上げています。

その1年前は、東京で普通にサラリーマンをして働いていたのですが、学生の時代から、自分は何を目的にして生きていけばいいのだろうなど、そういうことを考え過ぎてしまう、ちょっと変なところがありまして、大学を一回やめてしまったりとか、いろいろなことをして、親にも迷惑を掛けてきて生きてきたのですが、社会人になってからも、自分は何をやって世の中の役に立って、自分の居場所を作っていくとか、自分が人から求められる、生きていく実感を作っていけばいいのかなということ、ずっと悶々と考えてきたのです。

2010年、リーマンショックの後に、東京のばりばりの営利企業のリクルートという会社にいたのですが、そこを辞めまして、地元は福島なのですが、御縁があった仙台に来て、何をやろうかとふらふらしていたのです。

ノープランで独立してしまったので、収入もなく、そのとき私はちょうど結婚をして奥さんも東京からついてきたので、二人とも無職で結婚をしました。収入がない中で結婚するという、ちょっとあほなことをやっていたのですが、ふらふらしている中で、加藤哲夫さんというNPOの世界ではちょっと有名な方が仙台にいらっしゃったのです。仙台市の市民活動サポートセンターなどを作ったような方ですが、その方に声を掛けていただいて、NPOをサポートする活動を始めたというのが、私がNPOに関わり始めたきっかけでした。

人様のNPOをサポートする活動をやっていく中で、ちょうど1年後に東日本大震災が起きて、そこからは自分で何かやりたいなという気持ちだけで動き出して、たまたまやり始めたのが、避難所の中で生活をしている子どもたちのところに学生のボランティアと一緒に入って行って、まだ学校が始まる前だったので、一緒に勉強しながら、学校が始まった後についていけなくなってしまうような子たちをできるだけ減らしていこうという活動が最初でした。

そうした活動をしていく中で、避難所から仮設にも移って行って、4年半ぐらい仙台の仮設が中心でしたが、ボランティアと一緒に伺って、そこで生活をしている子どもたちと一緒に勉強したりとか、途中から勉強よりも、勉強をきっかけにして子どもの声に耳を傾けたりとか、それこそ子ども食堂とは言っ

ていませんでしたけれども、一緒に御飯を作って食べたりだとか、そのような活動をやってきました。

そうした中でより家庭の中にいろいろな困難を抱えた子どもたち、親御さんたちが、震災から時間がたつにつれて残っていくような状況があり、これは震災だけの問題ではなくて、震災前からあった子どもの貧困といった問題や状況が、震災があったから見えるようになったんだなということを感じまして、団体を法人にして、子どもの貧困問題に対してちゃんと地域に根ざして取り組んでいこうということを考えて、7年、8年近く、活動をやっているという状況です。

ちなみに、私のプライベートの話ですけれども、子どもが2人おりまして、上の子が6歳の女の子で来年小学校です。下の子が2歳の女の子、2人とも女の子ですけれども、上の子は震災の後の2012年に生まれました。私は震災後、この活動を立ち上げて、当時はスタッフもほとんどいなかったのに、寝る間を惜しんで働いていましたけれども、私の妻は産後うつになりまして、本当に人が変わったようになってしまったのです。顔を合わせると殺意を前面に押し出したような顔をして、一言も会話しないし、もう消えてくれみたいなことを言うし、後から聞いたら殺してやりたいと思っていたらしいです。

どうしてと思ったのですけれども、妊娠しているときに私が言った言葉がずっと引っかかっていたりなど、私もずっと家にいないような状況でしたので、そういういろいろな積み重ねがあったのだろうと思うのですが、そうになっていくと、やはり、上の子は特に小さい頃、私に対して余り懐かなかったです。私が家に帰ると、「帰って」みたいな感じで玄関のほうに押ししてくるのです。「いや、家だから、帰ってと言われても帰る場所ないんですけど」という感じでした。やはり母親の気持ちと子どもは何かリンクすることがよくあると私はそれをすごく実感していました。今はすごく落ち着きましたけれども、母親は当時すごく精神的にびりびりしていたので、やはり子どもに対しても、少し片付けをしなかったら、すごく激昂して、外に出しておもちゃをぶん投げたりして、僕は「児童相談所に通告されるからやめて」というようなことを言うのですけれども、「うるさい」という感じで怒ったりしていました。今日のテーマは子どもの虐待ですけれども、虐

待っているいろいろありますよね。本当に事件になるような虐待もあれば、マルトリートメントという言葉で言ったりするのもかもしれませんが、不適切な養育、ちょっと怒鳴ってしまったりとか、ちょっと叩いたりとか、そういうことまで含めて、いろいろなものがあると思っています。私自身も、人様に胸を張れるような親では全くなく、ある種そういう当事者側というか、うまく子育てができてない家庭の一員だと感じているので、余り偉そうなことは言えないなと思っています。

私たちの法人がどんな事業をやっているかというところ、一番大きいのは、生活困窮世帯を対象にした学習、生活支援事業という、これは2015年に施行された生活困窮者自立支援法という法律があるのですが、その法律に基づいて、各地の自治体さんと共同という形でやっている事業です。生活保護を受けている家庭、あとはひとり親の家庭で経済的に少し苦しい家庭や、就学援助を受けている家庭の子どもなど、基本的には経済的な困窮というラインを設定した上で、子どもたちを受け入れる学習支援の教室を作ったりしていますが、私たちが大事にしているのは、学習支援だけではなく、関わっていく中で見えてきた家庭の中の問題やお悩みを拾い上げ、いろいろな地域の機関と連携しながらサポートしていきましようという、家庭支援も含めた事業という形ですね。

これが今、仙台市、岩沼市、白石市、あとは宮城県の21市町村全部を対象にして、結構広い地域でこの事業をやっています、年間、全部で500人ぐらいの子どもが参加していますので、規模としてはそこそこ大きいかなと思っています。

あとは、これは自主事業で仙台駅の東口に1か所しかないのですが、フリースペース、フリースクールといいますか、不登校の子たちの居場所というものも、やっています。やはり、生活困窮世帯のお子さんたちの中で不登校のお子さんはずごく多く、宮城県は3年連続でしたか、ワーストワンとこの間発表されましたけれども、中学生の不登校率は4%ぐらいでした。私たちが関わっている子どもだと10%を超えているので、世間よりすごく不登校の子どもが多いという状況です。そうした子たちの日中の居場所、家から出てきて人と関わって、少しずつステップアップしていけるような場所が必要だと感じまして、フリースペースを作って運営をしています。

それから、今日のテーマの子ども食堂です。後で映像も御紹介できればと思っていますが、私たちは多賀城市で1か所、子ども食堂を運営をしています。

それから、保護者向けの講座なども自治体と連携をしてやっています、高校の進学費用に関する講座や子どもとのコミュニケーションの研修などいろいろなものがありますが、どの事業も考え方は一緒です。門間さんからもお話がありましたが、孤立している家庭の子どもたちとつながる入口をたくさん作っているという考え方です。学習、フリースペース、食事、保護者向けの講座など、いろいろな入口を作っていく中でつながっていき、関係ができてくる中で、ボランティアの方も400人以上関わっていますし、いろいろな企業、行政の方とも連携しながらやっていますけれども、子どもや家庭がいろいろな人たちのつながりの中で育っていく関係を作っていきたいというのが一つですね。

表向きには、高校の進学率を上げるとか、中退することを予防するというのも掲げていて、それも大事なのですが、もう一つ、私たちが大事にしていきたいと思っているのは、一つの価値観だけを当てはめるのではなく、いろいろな価値観や考え方があって、いろいろな考え方、生き方があっていいということ、人を人とのつながりの中で気付いていけるような社会を作っていきたいなと思っています。

一つの価値観だけにはまると、やはり苦しいですよ。僕自身も、うちは普通の親でしたけれども、公務員の親で、自分の生き方と違う生き方を認めたくないというようなことがあったようで、僕がこういう活動をやっていると、余り褒められないですよ。いまだに「おまえ何でこんなことやってんだ」ということを言われています。それなりに頑張っているけどなと思うのですが、やはり余り認められていないと思います。

いろいろな価値観で受けとめてもらえる社会があったほうが、もう少し気持ちが楽に生きられるのではないかなと思っています、何が正解なのか分からない社会ですよ。今ある仕事だってなくなっていく可能性が当然あるわけですから、そうした中で、子どもたちとも一緒に、これからどうやって生きていけばいいのかということを考えていけるような関係ができるという個人的には思っています。

もう一つは、見守るということも、やはり大事だ

と思っています。お話ししたとおり、関係ができてくるうちに、外から見ても、悩みなどないような子どもが、実はいろいろな困りごとを抱えて生きているということが見えてくるのが、結構珍しくありません。そういうときに、それを聞いて終わってしまうだけではなくて、きちんと拾い上げて、行政の専門機関などと連携しながら、何かできることがないかと考えて見守りをできるような関係を作っていくということも大事にしていきたいということが、僕たちはいろいろな事業をやっていますけれども共通している部分となっています。

今日のテーマの子ども食堂ですが、お話ししたとおり、多賀城市というところで多賀城こども食堂というのを2016年6月からやっています。もう2年ちょっとたちました。みやぎ生協さんと連携してやっているので、場所は生協のお店の中の集会室でやっています。先ほどの門間さんのお話で言うと、ケア付きという分類になる子ども食堂で、私たちは参加する対象を地域の誰でもいいですよとはしておらず、条件を付けていまして、例えば生活保護を受けている家庭、ひとり親の御家庭、あとは就学援助を受給している世帯など、幾つかの条件を付けています。

登録制にしているので、誰でもふらっと来ていい場所ではなくて、最初に入るときに基本的に親御さんも含めて簡単な面談をさせてもらって、申込書を書いてもらって参加するという流れです。対象は、小学生から高校生年代と、その保護者としていまして、週1回、毎週金曜日の夜に開催をしています。

今、利用者が20人ぐらいいます。ボランティアとかスタッフが10人ぐらいいるので、毎回30人ぐらいが参加する感じで、生協の集会所は広くてすごくいい場所ですけども、キッチンがそれほど広くないので、30人分の料理を作ると、もう作って片づけるだけで2時間ぐらいかかるという感じで、これ以上増やせないというのが正直なところです。

ケア付きの子ども食堂なので、いろいろな行政の機関や専門的な支援をしているNPOなどと連携をして運営していきまして、多賀城市役所の生活保護の部署、子育て支援の部署と連携して、利用者をつないでもらったり、あとは参加している家庭について共有したほうがいような情報が出てきたときには、要保護児童対策地域協議会に参加させてもらっ

て情報提供したりといったこともやっています。

これも映像で見たほうが早いので、映像で少し御紹介できればと思っています。7分ぐらいなので、少し長いですが、お付き合いください。

〔映像〕

大橋氏 今、ご覧いただいたのが、私たちが運営している多賀城こども食堂です。最初の自己紹介といえますか活動紹介は以上でございます。

栗林氏 ありがとうございます。

皆さんも、長い時間お疲れ様でした。

大橋さんが活動紹介の前に、まずは自分の奥さんの話をされて、貧困ではなくても、いろいろなお母さんの中で、行き詰まって子どもたちに声を上げてしまったりというのは誰にでもあり得ることだと思いますし、大橋さんのことをお父さんに代わって私が褒めたいと思います。本当によくやっていると、聞いておりました。

皆さんも長い時間聞きっぱなしで結構お疲れではないかと思います。ここから見ていると、皆さん結構険しい顔をしていらっしゃいます。やはり子どもたちが来たとき、お母さんが来たとき笑顔で迎える。それは子どもの問題だけではなく、地域でも笑顔で人と接することが大事なことだと思うのですが、皆さんがちょっとほぐれて笑顔になってほしいと思いますので、ここで5分ぐらい、隣の方と今まで聞いた話で「これよかったね」とか、「行政とこんな連携してるんだ」とか、こういうおせっかいな人たちのことについてどう思うかなど、お互いに話す時間を作りたいと思います。

よろしいですか。皆さん、席も距離を置いて、隣の方と多分何も話さないで帰ってしまう可能性もありますので、ちょっとおしゃべりタイムを作りたいと思います。これから5分間、今までの話の感想を言い合っただけであればと思います。よろしく願います。はい、スタート。

〔おしゃべりタイム〕

栗林氏 そろそろよろしいでしょうか。

5分前と、皆さんの表情が全然違います。本当に良かったです。

では、ここからは、子ども食堂ってやはりいろいろな人たちがおしゃべりして、笑顔になる場で、そ

こに来る子どもたち、お母さんが子ども食堂で一緒に御飯を食べることによって、こんなお母さんや子どもたちがこう変わっていったというような事例があれば、4分以内で発表していただきたいと思います。よろしくをお願いします。

では、兼子さんからお願いします。

兼子氏 うちの食堂に来るママさんの中には、やはり御自身もそうですし、お子さんも障害を持っているというような御家庭がありまして、そういう人たちは、初めて普通の人たちと同じ空間で食事をとったということがあります。要するに、いろいろなものでくられている空間ではそうした場はあったけれども、そうものに縛られない空間に来て、本当にいろいろな人たちのお話が聞けたということで、子ども食堂のお手伝いに回ってくださっているママさんもいらっしゃいます。

それから、子どもたちの変化としては、やはり上の子が下の子の面倒を見るとか、家でやらないような、自分で準備をして自分で片付けるということができるようになって、反対にお母さんたちがびっくりというようなことがありました。やはりこうやって外の人といいますか、自分たちと余り関係のない人たちと関わることで、それを見て自分がいいなと思ったから行動に移すという、そういうことができるようになったのが、すごくうれしいとお話をされてきました。

それから、いろいろなお母さんたちが関われるようなセミナーやスクールなども準備してあるので、今までは関心はあったけれども、どうやってそこにつながればいいのか分からなかったというお話だったのですが、こうして関わればいいんですねとか、こんなふうに参加して、自分でもやっていいんだとか、



関わっていいんだというような、そういう経験ができたとお話をされるママさんたちが多いです。

栗林氏 ありがとうございます。結構ママたちが自己を肯定できる、そんな場になっているのですね。では門間さん、お願いします。

門間氏 私どもせんだいこども食堂には、0歳から18歳までの子どもたちが来ています。エリアですとか、家庭の状況だとかを特に限定しておりませんので、いろいろな方たちがいらっしゃいます。地域を限定していない、地域とがっちり組んでいないというのはなぜかという、私たちスタッフは全員がフルタイムで働きながらのボランティア活動なので、日中、学校との連携をする時間がたまたまなかったということがあるのですが、逆に、地域で生きづらさを抱えた親子さんが多く集まる場になっております。地域に子ども食堂をはじめとする「場」があっても、そこにつながることができず、私どものほうにいらっしゃっている方がおられます。それから、私どものほうに来ているうちに、だんだんと勇気やパワーが出てきて、地域の子どもの食堂をはじめとする「場」につながっていくというようなことも出てきています。

外国籍のお子さんや、お子さんだけではなく、親御さんも障害をお持ちの方もおられます。それから、以前は御飯を食べに来ていたけれども、だんだんとスタッフになったお子さんや親御さんもおられます。10代から70代の方がボランティアとして参加してくださっていて、その中で親子で関わってくださっている方たちもおられます。

ある親子さんのケースなのですが、1回目に来たときに、その親子さんが帰られた後、床に見事な絵が描かれていました。私たちは、会場をお借りしているので、すごくびっくりしました。ペンで床に大きく、非常にのびのびとしたすばらしい絵でした。実は親御さんもお子さんと一緒に書いていたということが後から分かりました。

2回目も何と全く同じことが起きて、でも、私たちはその親子さんには特段何も言いませんでした。3回目から、私たちはどうしたかという、ペンをちょっと隠すようにしたのですね。そうしたら、何となくペンのあるところをうろろし始め、「ペン

はないの、お絵描きしたい」と始まったのですが、いろいろな関わり合いの中で、遊び方を一緒に工夫をしたり、お子さんだけではなく親御さんと話す時間を多くつくっていったところ、その親子さんはずっと定着していらっしゃるようになり、今はペンを見ても床に描くというようなことはされなくなりました。私たちの対応が正しかったのか、正しくなかったのかはわかりません。

ですが、今ではそのお子さんは、子ども食堂に来るほかの小さいお子さんや新しく来た親子さんたちに、手洗いはこうするんだよとか、箸の持ち方はこうするんだよと、まさに小さなスタッフになっております。子どもの成長に伴って、お母さんも余裕が出てきました。まず洋服などの身なりが変わられました。私たちとのコミュニケーションも増え、表情も変わられました。お子さんとの向き合いにも余裕が出てきた、楽しい、とのお話もお聞かせくださるようになりました。お子さんの変化によって、親御さんが変わられていくということを目の当たりにさせていただいております。ありがとうございます。

栗林氏 はい、じゃあ。

大橋氏 先ほど、動画にも少しお話があったのですが、ほかの県からほぼ一文なしでやってこられたという母子家庭、かつ、お子さんがたくさんいらっしゃる多子世帯の家庭につながったというケースがありました。

緊急支援的に子ども食堂につながって、まずはその日の御飯ということで参加してきたのですが、私たちの子ども食堂は、お話ししたとおり、今は参加者全員がひとり親の御家庭ですが、県外からぼつんと来たお母さんに対して、既に参加していらっしゃる母子家庭のお母さんが結構おせっかいを焼いてくださいました。ここのスーパーに行ったら安く買えるとか、ここの市営住宅は受かりやすいとか、御飯を一緒に食べながらそういう話をちゃんと教えてくれるのです。そういう関係があるのはすごくいいなと感じたケースがありました。

その後も、その家庭はいろいろ見守りが必要な状況でありまして、余り話をするとばれてしまわずいですが、借金をしたり、その借金ですごくいいものを買っていると子どもが言ったりなど、こ

れはまずいのではないかみたいなことを、スタッフで情報共有して、先ほど出たような関係者と情報共有したりして、そのようなことをやって関わっているケースがあります。

栗林氏 はい、ありがとうございます。

そうですね、私も実際、子ども食堂をやっているのですが、これはちょっと共有したほうがいいなということは、やはり大橋さんと同じように、子ども家庭支援センターさんやソーシャルワーカーさんと共有します。そうすると、私たちは本当に遠くからしか見守れませんので、「引き続きお母さんの話を聞いてやってね」、「よろしくね」というような形で連携しているのですが、皆さんもそのような形に今後なっていくといいなと思っています。

大橋さんのところは理想だなと思いますが、では具体的に、今日は子どもの虐待防止のフォーラムですので、子ども食堂を通してこういう虐待がなくなるかもしれない、予防の観点として有効だ、そうしたアピールも含めて、子ども食堂の役割を教えてくださいませんか。お願いします。

兼子氏 子ども食堂は地域の中にあるものなので、いろいろな情報がたくさん流れている中で、その人が欲しい必要な情報がきちんと伝わるといことと、それから御自身の子育てについて、いろいろな人の話を聞くことによって、自分の子育てが決して間違いではないということに気付き、そして子育てを楽しめるようになるということが一番なのではないかと思っています。

私自身も、実はもう5歳になる孫もいるのですけれども、二十歳で結婚して21で出産という、周りからは出産そのものを反対されます。その後、今度子育てで自分自身が苦しくなって相談すると、「だから生まなきゃよかったじゃないか」と言われます。

そういう周りの大人たち、自分の親なども含めてそうですけれども、安易にそういう言葉を投げつけてしまうかもしれないですが、受け取る側してみると、すごく傷付きます。だから、絶対に私はこの人たちに負けないように立派な子どもを育てないといけないという思いから、自分自身が虐待だと思っるのは、上の子を育てるときにすごく厳しく育てました。し

つけという名で、本当によく手を上げていたなと思いますし、特に勉強に関してだけは、ほかの家に負けないくらい厳しかったというふうに思っています。

なので、思春期を超える頃には、やはり生きづらさを感じる、リストカットから始まり全身にピアスを開けてというような、自己肯定感の非常に低い子どもになってしまいました。それはなぜかという、自分が認められる空間がないからです、親自身が。けれども、子ども食堂に来ることによって、本当に自分がこれから何をしたらいいのかということを教えてもらったり、周りの人たちが「いやいや、それでいいんだよ」と言ってくれたりする。そういう人たちと関係性を持つことで、本当に自分の子育てに自信を持って子どもと関われる。そして、子どもに必要なのは、本当はお母さんの笑顔だということに気付かされた。そういうお話をたくさん聞きます。

そういうことがあるということは、それぞれが当事者にならないといけないということと、それから、言いにくい話なども、食べるというところでは普通に話せるということもあります。難しい空間だとなかなか話せないことが、その場に行き、そこで安心して聞いてくれる、そういう人たちがいるということ。そういうことを体感することによって、やはり子どもに対する親の学びといったところに行き着くと思うので、1か所だけではなく、たくさん必要だというのは、私自身も子育てをしていた時にサークルのようなものに行こうと思ったのですが、行ったときにもうグループができていて、そこに入れなかったのです。そこしか知らないと、もう本当に自分の殻に入るしかなくなってしまうので、門間さんのところのように、いろいろなところから来られるような、そういう情報がそれぞれの子ども食堂の中にあるというのが理想ではないかと感じています。

門間氏 私どものほうのメンバーは、10代から70代までおりますとお伝えしましたが、実は70代のメンバーはお母さんたちから引っ張りだこです。お母さんたちの中には、自分が成長してくる過程で親子関係がうまくいかなかった、特に母親と今も溝があるとか、そのまま母が亡くなってしまったとか、いろいろな思いを持っているお母さんたちがおられます。

そうしたお母さんたちの多くは、子育てに自分が

育ってきた過程を重ね合わせることが多くて、子育てにつらさ、苦しさを感じていたりだとか、ついつい、兼子さんのお話の中にもありましたが、母として私はきちんとできているのかと自分を追い詰めやすくなっていたりすることがあります。

子ども食堂に来て、その70代のスタッフと、血縁ではありませんが、自分が得られなかった親子関係の取戻しというのをされていらっしゃるのかなと最近見ております。

自分のお母さんにはしゃべれなかったけれどもという前置きで、いろいろなお話をしたり、それから自分が子育てでつらいという話を、70代、60代のスタッフにするお母さんたちが増えてきています。

あとは、私ども月に2回の活動でして、毎日を行うことができません。私どものほうにいらっしゃったお母さんたちの中で、日々が本当に苦しい、つらいというような方がいると、そのお母さんがどちらにお住まいなのかとか、どのエリアまでだったら動けるかというようなお話を伺い、お子さんの状態ですとか御年齢なども踏まえて他の子ども食堂さんと連携しながら、その親子さんを見守っていくということをさせていただいております。

それから、宮城県にはキャブネット・みやぎさんという、長らく児童虐待防止について取り組まれている団体さんがおられ、そちらの母親グループさんに子ども食堂の情報提供をさせていただいています。すぐには足が向かないかもしれないけれども、よかったら来てね。もし子どもと一緒に来るのがつらかったら、ボランティアという形でおいで。お母さんたちのサード・プレイスとして子ども食堂を使ってほしい。そして、できたら、もう一歩進んで子どもと一緒に来てねというような思いでおります。

栗林氏 はい、ありがとうございます。

大橋氏 虐待予防に子ども食堂がどう関わるかという話だと思うのですが、お手元の資料、プログラムの33ページの7と書いてあるところです。

虐待と一口に言っても、先ほど少しお話をしましたが、上から下とといいますか、いろいろなものがあると思っていまして、まず誰でも起こし得ます。自分も含めて誰の身にも起こり得るような不適切な養育、怒鳴ってしまったとか、ちょっと叩いたり

いったことに関しては、子ども食堂はすごく効果があるのではないかなと個人的には思っています。今日、お二人からもお話が再三出ていますけれども、子どもや保護者の気持ちを受けとめるということもそうですし、見守りや保護者同士のつながりをつくるといった効果は確実にあるだろうというふうに思っています。

特に保護者との関わりという点で子ども食堂がいいと思うのは、やはり保護者とつながりやすいということだと思います。私たちは、御紹介したとおり、ひとり親の御家庭向けに教育費の講座などもやっていますが、集客はすごく大変で、全然集まらない、集めるのがすごく難しいのです。やはり皆さん忙しいですし、そういう中で時間を作ってわざわざ来ることはすごくハードルが高い。自分のために時間を作るって、すごく抵抗のある親御さんもいらっしゃるみたいです。

そうした点で言うと、子ども食堂はもう少し自然に、生活のサイクルの中に組み込まれて、御飯食へに行くということでも来てもらいやすいというか、定期的に会いやすい、そういう場なのではないかなと感じているところはあります。

子どもの見守りという点でも、子どもについて学校などで把握している情報も当然ありますが、やはり学校でも言えないことはたくさんありますし、お話ししたとおり、不登校のお子さんも結構多いですから、学校にも行っていない子は、その情報を誰も知らなかったりということが結構あったりします。

生活保護を受けている家庭でも、やはりケースワーカーの方は親御さんへの関わりが中心で子どもとは会ったことがないということも結構聞きますので、子ども食堂だけが知っている情報というのは意外とあったりするのだろうなと思っていいます。そういう意味でも、子ども食堂が子どもの見守りに役立つと、力を発揮する部分というのはたくさんあるのではないかなと感じています。

一方で、命に関わるような緊急性の高い虐待だとか、そういった部分については、正直子ども食堂がどこまで対応できるのかというのは、すごく難しいと感じているところがあります。私たちも、これまで8年間いろいろな事業をやってる中で、虐待ケースも結構遭遇してきました。児童相談所に当然通告することもありますけれども、通告してそれで

終わり、解決するということは今まで1件もありませんでした。やはり個々のケースはすごく複雑で、例えば私たちしか関わっていない子どもがいますと。ここしか居場所がありませんという状況です。でも、児童相談所に通告したら、そのケースでは、その家庭に対して、アスイクというところから通告があったと言わなくてはいけないという状況だったのです。そうになると、家庭とうちの関係は切れてしまうわけです。子どもの居場所を切っても通告すべきなのか。

その子どもが訴えている状況というのも、本当かどうか分からない情報もあつたりします。だから、虐待、ネグレクトが疑わしいという状況の中で通告すべきなのかという判断は、すごく難しいことも実際あつたりして、本当にいち早く電話すれば終わりということではなくて、継続的に慎重に、いろいろとお互いに相談し合いながらやっていかなくてはならないようなケースがごろごろしています。そういうものをボランティアベースでやっていらっしゃる子ども食堂が本当に抱えてしまったときに、大丈夫なのかなという不安は正直思っています。私たち自身がすごくそれで疲れてきた。大変な思いをしてきたということがあるので、これを皆さんがやるのは、本当に大変ではないかと感じているのが正直なところだと思います。虐待予防といったときに、全てを子ども食堂ということではなくて、その中でどういう部分は子ども食堂が担えるのかという視点をちゃんと持つことは大事ではないかと思っています。

栗林氏 ありがとうございます。

最後の大橋さんの視点もとても大切だと思います。私も、子ども食堂はやはり予防だと思います。でも、そういう予防、大切にされる経験を地域で小さいうちにたくさんする。お母さんも大切にされる。豊島区は、今まで子ども課というところがあったのですが、0歳から18歳だけでは追いつかない、実は19歳から39歳の若者に課題を抱えている人が多い。ただ、特化した窓口がないということで、今年から豊島区子ども課は豊島区子ども若者課になって、0歳から39歳までが対象になりました。

つまり、子ども食堂に来る子どもも親も支援する必要があるというように、ほかに子育て支援課もある中で、私、今日午前中の話も聞いたのですけれど

も、子どもが大切にされるというのはとても大切なことなのだ。先ほど、大橋さんの自分の子育ての話もありましたけれども、私たちおばちゃんは、皆さん自分の子にはやはり責任もあり、厳しくしてしまっし、私も失敗があります。たくさん、「あのときああしなきゃよかった」ということがあるけれども、地域の子にはある意味、半分責任がないので、おおらかでいられます。無条件で大切にできるのです。是非、無条件に大切にすることだけの子ども食堂かもしれませんけれども、門間さんから宮城県に50か所ぐらい子ども食堂があるというお話がありました。無条件に無責任に子どもを褒めてくれる人が50か所に例えば20人いたら、何人いるのでしょうかね。この輪を増やしていくことが、虐待を予防する、なくす、これから大きな種になっていくような気がします。

というところで、皆さんには、これからの子ども食堂が目指すもの、目指してこうしたいみたいなものを書いたパネルを御用意いただいています。ここにキーワードを書いて、自分たちが目指すものを発表していただきます。私にもありますので、私も書きます。

[パネル記入]

門間氏 やはり子どもも大人も一人にしない。これが私たちせんだいこども食堂の目指すところです。とにかく、今、2時間近く皆様と御一緒させていただいておりますが、多くの方とアイコンタクトをとらせていただいております。このように、一期一会かもしれませんが、少しでも多くの方とつながりながら、大人も子どもも、国籍、性別関わりなく一人にしないということを、私たちは目指していきたいなと思っております。



兼子氏 私はちょっと長いのですが、親子で認め合って、そして未来を語れる居場所づくりを目指していきたいと思っています。何か大人になると、どうしてもいろいろなことを知ってしまうので、こんなことできるわけないと諦めるのではなくて、子どもと一緒にわくわくできるような、これからの未来を語れる、そういう場所づくりを目指して頑張っていきたいと思っています。

大橋氏 何か趣旨を勘違いしてしまいました、下手な絵を描いてしまいました、「一人にしない」です。同じです。子ども食堂のいいところは、誤解を恐れずに言えば、いろいろな方が立ち上げやすいということだと思います。こういう社会の状況に関心を持った方が、まず何かやってみようと思ったときに、すぐにやってみることができるようなものになってほしいと思っています、やっていく中で、一つ一つの活動は完璧ではないにしても、同じような気持ちを持った人たちが増えてくるような流れを作っていくのではないかと考えているので、まずはやってみて仲間を増やして行ってほしい、そういう気持ちです。

栗林氏 今回は、私も参加します。私は、子ども食堂がソフトインフラになってほしいと思います。子どもたちはお金も持ってないです。しかも行動範囲がとても狭いです。小学生であれば、小学校区にしか、そこにしか生きていないのです。だとすれば、どの小学校区にも最低一つはある、できれば選べるほどに2か所、3か所と、御飯を食べて大切にされる場所が当たり前、どの子にとっても町にある、そんな社会を目指したいと思っています。

では、最後のお題なのですが、今は、子ども食堂の実践者の発表でした。でも、今日は行政の方や、もっと困難なケース、そんなこと言っている場合じゃないというお子さんと関わっていらっしゃる方もいます。今後、私たちと行政と企業さん、兼子さんのところは企業さんと連携しているとありました。大橋さんのところは行政で、仙台は農家さんとも連携している、そういうつながりも作っているということで、今後パートナーシップをどういう形で組んでいくか。これからどういう連携をしていきたいかというところを一言で書いてください。お願いします。

兼子氏 「笑顔で楽しく」をお願いしたいと思います。なぜかという、私たちのように若い団体だと、やはり実績がないということで、非常に眉間にしわを寄せて、何でおたくが来るんだというような顔をされることもあります。そうせずに、みんな笑顔で、何かやりたいところと一緒に協力し合っで楽しくやっていきたいと思います。

門間氏 自治体の皆様に、是非お伝えしたいのは「御一緒に」。ハートも付けさせていただきました。実は、自治体の皆さんと社会福祉協議会さん、企業さん、それから農家だけではなくて漁業者の皆さん、お寺さん、たくさんの方の中で、このような活動をさせていただいておりますが、さらにここからもう2歩、3歩、自治体の皆様も地域に生きる個人として、そして自治体の職員として、ぜひ御一緒にいただけたらなと思っております。よろしく願いいたします。

大橋氏 私は、「子ども食堂を支える仕組み」。同じくハートを付けさせてもらいましたけれども、今、付けました。先ほどの話にもつながるのですが、子ども食堂の中に、すごくリスクのある家庭や子どもが参加したときに、それをボランティアベースでやっている子ども食堂が支えるのはすごく大変なので、きちんと子ども食堂をサポートするような仕組み、機関が地域の中に必要なのではないかと感じています。

一緒に子ども食堂に関わって行って、その子たちを引き取るというか伴走していく役割と一緒にやっていくような、そういう人、機関がそれぞれの地域にあるということが、せっかく立ち上がってきた子ども食堂を潰さないことにもつながっていきますし、より生かしていくことにもつながっていくと思



いますので、こうしたものが必要ではないかなと感じています。

栗林氏 皆さん同じことを言ってもつまらないなと思って、私は「ごちゃまぜ」。兼子さんが言っていました。障害を持った方も、いろいろな方が集まる。門間さんも同じようなことをおっしゃっていました。これから私たちも、こんなおせっかいな人ができることはすごく限られています。でも、やはり行政や制度、そういうものは、生活保護であったり施設であったり。施設の御飯は仕事として出している方がいて、当然時間になると食べられる。これが児童養護施設だと思いますけれども、これは以前施設の方に言われたのですが、子ども食堂の良さは、やはり作りたい、作ってあげたい人たちが作っている御飯、それは家庭の御飯に近いですとおっしゃいました。同じように、来る子ども、お母さんだけではなく、何かしたい、しなくてはいけない人たちもごちゃまぜになって、これからできることを持ち寄る。こういう仕組みができたらいと思います。

では、ここからはフロアの方から質問や感想などあれば手を上げていただきたいと思います。はい、お願いします。

分科会参加者① 徳島県で高校の教員をしています。

実は昨日、地元の子どもの食堂に部活の生徒を連れて行って、そこで子どもと遊んだり、御飯を食べたりしました。私自身、何か所か生徒を連れていったりしたのですが、運営する人の考え方によっていろいろ形が違いますよね。その中で、大人からも子どもからもお金をとらないところもあったり、大人からはとるけれども、子どもからはとらないところもあったり、あるいは両方からとるところは、持続可能にするためには、やはり続けられるような仕組みを作る必要があるのでは、お金をとらなければいけないという考え方の人もいたりします。例えば今日でしたら、大橋さんの場合はお金をとらないということだったので、一つ目の質問は、皆さんにとって、どのような形の子ども食堂が理想なのか。昨日行ったところは、普段はレストランをしているところがやっているの、子どもたちは食べるだけだったので、別のところに行ったら、子どもたちが配膳のお手伝いなどもして、子どもと一緒に食べる

という、そういうところがあったりして、どのような形が理想だと考えているのかというのを伺いたいのが一つ。

それともう一つが、高校生を教えている立場として、生徒たち、高校生にも何かできることがないかということで、我々ができることを教えていただけたらと思います。

ちなみに、昨日行ったところに言われたのは、ビニール袋が欲しいということでした。前、行ったときに、お米を持っていったのですけれども、そうしたら「ありがとうございます」と言ってくださったのですが、最後、ボランティアの人が集まったときに、ビニール袋があったら持ってきてくださいと言われましたがそうした発想はありませんでした。なぜかという、お菓子を寄附してくれたところがあって、最後、お菓子を子どもたちに分けてあげるのですが、それを分けるのにビニール袋を使うのです。そこはフードバンクさんがやっているのですが、食材はいろいろなところから提供してもらえるのに、ビニール袋を買うのはお金を使っていると。もったいないと思うので、余っているビニール袋を寄附してくれるとありがたいですと言われて、そういうふうなことがあるのだと、やはり行って話を聞かないと分からないなと思ったのです。

生徒たちにもそういうことを伝えているのですが、高校生にもできること。どんなことがあるのかというのを、教えていただければと思います。よろしくお願いします。

栗林氏 こちらから、どんなやり方がベストかという、やり方についてと、そして高校生のできること。

兼子氏 うちは一応大人300円、子ども100円をいただいています。事前にいろいろお話しをしていく中で、その金額を出すのが厳しい人は最初からいただかないようにしています。その部分のお金をどうやってフォローするかというと、今のところは助成金も一部入っていますし、それから御寄附をいただいています。

学生さんの関わりですが、うち中学生ぐらいからボランティアさんで来てくださっているのですが、自分の来られる時間に一緒に作ったり、もちろん検便とかをきちっとしてもらって、保険を掛けて

ですが、そのように関わってもらったり、あとはやはり、大人と遊ぶのではなく、自分の年の近いお兄さん、お姉さんと遊ぶというのが、すごく子どもたちにとって楽しいようなので、お母さんがゆっくり食事をとれるように託児してくれるという学生さんたちもいます。

門間氏 私どもも、子どもは無料で大人の方は300円となっているのですが、御事情のおありになる方は大人の方も無料で御利用いただいております。そして、私たちはチームの立ち上げからずっと持続可能性ということを非常に重視しておりまして、一度立てた旗を下ろさないためにも、運営にかかるコストをとにかく削減するという心を掛けています。会場を無料提供していただくですとか、昨年1年間では333の個人と団体から御寄附をいただきましたが、それらを循環しながら、なるべくお金をかけないで、けれどもたくさんの手をかけて、目をかけて行うということをさせていただいております。

高校生のできることですが、「まずは御飯を食べにおいでよ」と、これを伝えたいです。御飯と一緒に食べるということが非常に大きいですね。そこからその高校生のお子さんがどういうことをしたいのか、そのお子さんの御性格だとか御希望に合わせて一緒に考えていきます。高校生や大学生の皆さんは、誕生日会やったほうがいいんじゃないかなど、いろいろなアイデアをくださいますので、ありがたい存在です。そうした関わりを生むためにも、まずは一緒に御飯を食べる、そこからおっちゃん、おばちゃんたちに関わっていただけたらと思います。よろしくお伝えください。

大橋氏 まず、高校生にもできることというと、私たちの法人自体が年間でも30人ぐらいの高校生のボランティアが、現在関わってもらっていますので、高校生の方であれば、ボランティアとして参加するということができるのではないかなと思っています。

門間さんがおっしゃったように、高校生ならではのアイデアや運営へのいろいろな意見、そういうのもいいなと思いますし、やはり子どもと年齢が近いほど、関わりやすいなというのは、正直感じています。どうしても年齢が離れば離れるほど、関わる

ための難しさというのを感じるボランティアの方もたくさんいらっしゃるのですが、高校生ぐらいだと、小学生、中学生とすぐ打ち解けやすいので、年齢のアドバンテージはやはりあると思いますので、子どもと関わってくれるボランティアとしては、すごくいいところがあるのと思っています。

理想とする子ども食堂ですが、いろいろなものがあるいいのではないかと考えています。これは冒頭お話ししたとおり、私たちの事業コンセプトは、いろいろな価値観とかに触れるような場所であり、自分の新たな一面に気付くような、そういう関係が生まれるような場になるといいなと思っているので、頭ごなしに「だめだよ」ではなくて、「そういうのもあるよね」と受けとめる関係があるような場が理想かなということと、もう一つは、やはり見守りですよ。何かあったときに、ちゃんと支えられるような場になっているといいなというのが、私たちの理想です。

栗林氏 ありがとうございます。ほかにありませんでしょうか。

分科会参加者② 福島県の伊達市から参加をしています。行政関係です。ようやくうちの市も、8月ぐらいから子ども食堂みたいなものを一般の方が始めました。何人かの方から、始めるにはどうしたらいいのかというふうなことを聞かれることもあり、広がりや若干感じてはいるのですが、先ほども門間さんがおっしゃったように、一度上げた旗を下ろせないというふうなところが、非常に重要なところだと思いますし、持続可能というところが非常に問われるのだと思います。そういう中で、運営をされている方にとって行政による支援といいますか、行政とのパートナーシップ、そこは何が一番大切だと思っているのかを、これから進めていく上でお聞きしたいと思います。

門間氏 かねがね、お願いしているのは、行政の窓口で、例えば「引っ越ししてきました」と転居をされてきた方が諸手続きなどでいらっしゃって、その方にお子さんがいらっしゃれば、是非子ども食堂をはじめとする子どもの居場所や子育てに関する情報提供をしてくださいということです。

それから、市政だよりなどに、子ども食堂などに触れるような内容をお取り上げくださいとお願いしています。情報提供、情報拡散というところを自治体さんにぜひお力添えをいただきたいと思っています。

窓口にチラシを置いていただく、これは無料でできますよね。そのために予算をとっていただく必要もございません。とにかくコンパクトな予算、もしくは0円で子ども食堂にお力添えいただける部分は、ものすごくたくさんお持ちです。そこをぜひお力添えいただけたら、御検討していただけたらと思っています。

栗林氏 すごいですね。誰もお金とか言いませんよ。今まで市民活動をしていると、活動を継続するには人、物、金なのだとか、よく先輩方から地域で聞きます。でも、人、物、金が必要なのは子どもです。どんな家庭の子どもでも、やはり人に大切にされないといい大人にならない。大きくなっていけばお金も、学校に入れば絵の具道具から始まって物が必要です。でも、それもこういうおせっかいなおじちゃん、おばちゃんたちが集まって、ああだこうだ言っていると物は集まります。大切にされます。でもやはり、最後は生活保護という制度、そういうものが必要な子どもたちにきちんと届いてほしいと思います。そういうものが届いていても、制度にはつながっていても孤立している方は、どうぞこういうおせっかいなおばちゃんたちにつないでいただきたい。これが、私が行政にお願いしていることです。

ほかにありますか。

分科会参加者③ 皆様方のお話を聞いていて、こういうふうになりたいとか、こういう現状であるというお話をいろいろ伺っていて、こちらは門間様が一緒にやっていると、もっといろいろな人たちの協力が欲しいというものがあると思うのですが、例えばテレビなどから子ども食堂があるとか、子どもの支援はこういうのがあるというのは、いろいろな人が知っているとは思いますが、先ほどは子ども食堂の仕組みをもっと強化したいとありましたけれども、そういう観点から見て、それぞれの皆さん方がどのような人たちがいたら助かるのかなというのを具体的に、差し支えのない範囲で教えていただけたら

ら参考になると思いました。

門間氏 ありがとうございます。せんだいこども食堂は、立ち上げのときから、子ども食堂の立ち上げ支援と、それから継続支援ということ、主に宮城県内で行わせていただいております。その中で団体さんから、いろいろなお話を伺いますが、必要な人材はそれぞれの団体さんによって異なります。

例えば中高生が多い子ども食堂ですと、少し先をいくお兄さん、お姉さんとして学習支援プラスアルファ子どもたちの悩みにも対応してくれるような若手が欲しい、それからうちはメニューづくりに困っているので、栄養士さんや調理師さん、飲食店などで調理の担当されている方、それから料理の腕に覚えありの方が欲しいというところがあります。昨年、痛切に私が思ったのは、東北は米どころですから、秋になるとお米の御寄附がものすごいのです。去年は300キロ、今年は約200キロぐらい届いたのですが、その一袋30キロの米袋を、仕事が終わった後担いで、いろいろな子ども食堂さんに届けるということをしていただきました。

「米袋が担げるようになる」という個人のスキルは上がりましたが、米袋持てる方、届けてくださる方が、個人的には秋のこの時期、とてもいて欲しいと思います。子ども食堂さんは、それぞれによって欲しい人材、来てほしいという方が異なっておりますので、是非、お近くの子どもの食堂さんに直に聞いていただきたいなと思います。このようなお答えでよろしかったでしょうか。

栗林氏 ありがとうございます。では、最後、一言ずつ、皆さんにお届けして終わりにしたいと思います。よろしく申し上げます。

兼子氏 おそらくここにいらっしゃった皆さんは、子ども食堂に対して非常に関心の高い方々がそろっていらっしゃると思います。皆さん、私もそうですけれども、始める前は何も持っていません。とりあえずやってみて、そして門間さんがおっしゃるよう

に継続していくのにはどうしたらいいかという仲間づくりをどんどんしていただきたいと思います。うちもホームページがあります。お問い合わせをいただければ、いろいろな情報をお出ししますので、是非それぞれの地域で自分にできることからスタートしてもらえたらと思います。ありがとうございます。

門間氏 今日は全国からたくさんの方がお集まりとお伺いしております。明日からまた、それぞれの地域に戻られて、活動やお仕事を通して地域の子どものために関わっていかれるのだと思います。今日のこのつながりを是非今後に生かさせていただきたい、また皆様と御一緒させていただきたいと思っております。これからさらに、どうぞよろしく申し上げます。

大橋氏 僕は宣伝です。私たちの法人で、宮城県さんと、あとせんだいこども食堂さんなどもネットワークに入っているのですが、これから子ども食堂を立ち上げたい方や実際にやっぴらっしゃる方を対象にした講座の事業をやらせていただいております。今年度でいうと、仙台と大崎、あと東松島、白石、この4地域で講座をやっておりまして、仙台は終わってしまったのですが、それ以外の3地域はこれからまだ講座を開催しますので、もし今日この場で皆さんのお話を聞いていただいて、自分もちょっとやってみたいな、立ち上げるだけではなくて、どこかでお手伝いしたいなという方も当然結構なので、まずそうした場を使っていただいて、皆さんが子どもたちのために一歩踏み出すような場になっていただければと思っていますので、是非よろしく願いいたします。

栗林氏 長い時間、お疲れさまでした。子ども食堂がプラットフォームになって、次から次へといろいろな子どもの支援が、この宮城で展開されることを祈っております。

これで、この会を閉じさせていただきます。ありがとうございました。